第3341号

教育新聞

週2回 月・木発行
発行所 教育新聞社
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
代表 ☎ 03(3295)7051
〔購読申し込み・お問い合わせ〕
http://www.kyobun.co.jp/
〔購読料・月額〕2,500円＋税
©教育新聞社 2015

子どもの多様な見方を生かす社会科授業

第11回

玉川大学教育博物館研究員・玉川大学講師
多賀 譲治

困難だと思うことから学ぶ

「インディカ米」といえば今でこそ「細長いパラパラのお米」と分かるが、つい10年前では、知らない人の方が多かった。平成5年の大凶作の年に、タイから緊急輸入されたインディカ米は日本人の嗜好に合わず、その印象は今日まで根強く残っている。そのインディカ米を栽培しようというプロジェクトをホームページにあげた。

平成15年のことである。参加したのは小学6年生の男の子N君と6校の小学校、2校の中学校で、北は青森県八戸市、南は高知県高岡郡と幅広い。種籾の提供者は玉川大学農学部である。「ベルパトマ」「ブルーベル」「IR36」という3種のインディカ米が選ばれた。複数にしたのは気候による差があるか、食味に違いはあるかの明確な実験目標をもたせるためであった。

多くの小学校で「バケツ稲」と呼ばれているイネの栽培学習が行われている。管理が悪くて枯れてしまう例も少なくない。私の学習ページには「お米の学習」という総合学習に対応したものがあり、田植えから収穫の時期まで質問やヘルプが数多く寄せられてくる。先生からの質問も多く、栽培のコツや害虫の駆除法など多岐にわたる。そんな中での「日本では栽培が困難」と思われるインディカ米の栽培実験であった。

結果からいえば、1人と2校で収穫できた。八戸の小学校では、こまめにビニールをかぶせたり窓ぎわに移したりと、高緯度上のハンディを見事に克服した。高知県の小学校では、害虫を直接手で取るなどきめ細かく手を掛けた。そしてN君は、「5月25日、分けつの前はIR36が枯れそうになり、一時はどうなるかと思いましたが、田植えした効果なのか、また少し元気になって新しい芽が出てきました」など、経過や質問を要所要所で送ってくれた。

明治維新の頃、さまざまな困難を乗り越え、冷涼な北海道の気候下で育つ品種を作り出した中山久蔵の話を持ち出すまでもなく、熱帯の植物であった稲を日本の気候に合わせていくために、歴史上多くの困難があったことは誰もが感じていることである。

「サムサノナツハオロオロアルキ……」のような冷害も近年まであった。こうしたことから、インディカ米の栽培には日本米以上の難しさがあろうことは、実験に参加した誰もが抱いていた予想であった。ところが、インディカ米は見事に実った。なぜか。インドのアッサム地方が原産といわれる稲にはもともと寒さに強いDNAが織り込まれていたからである。中山久蔵は試行錯誤を繰り返しながらそれを引き出した。したがって、熱帯で栽培されているインディカ米も、N君たちのように手を掛ければ、日本でも立派に育つことが実証されたのである。

私はかつて150平方㍍ほどの畑を借りて野菜を栽培していたことがあるが、そこで学んだことの第一は「手を掛ければ掛けるほど作物は立派に育つ」ということであった。子どもたちも丁寧に手を掛けることによってインディカ米のもつ能力を見事に引き出したのだ。苦労と工夫で得た知恵や技術は子どもたちの心の中で生き続ける。